

リルケと北杜夫 其の一

『マルテの手記』と『幽霊』の対比に向けて――

竹内 正（日本歌人クラブ会員）

はじめに

北杜夫は旧制松本高等学校（以下「松本高校」と略記）入学当時、父茂吉の短歌や上級生のバンカラな向学の気風と出会い、昆虫好きの理科少年から熱心な文学愛好者に変じていった。「松本時代の北杜夫 其の二――初期詩篇等の諸相――」（本紀要第七号）の「4 精神的思春期」では、杜夫が様々な読書に没頭し、ドイツ語の恩師望月市恵と出会い、トーマス・マン（Paul Thomas Mann）やリルケ（Rainer Maria Rilke）に惹かれていった様子について考察した。

杜夫が最初に惹かれたマン作品は『トニオ・クレイゲル』であったが、辻邦生との対談『北杜夫・辻邦生対談――若き日と文学と』（中央公論社）によると熱中したのは大学に入学後であった。杜夫自身は「ぼくは、マンの理性的・批評家的世界とは反対でしょ。極端だから惹かれたんですよ」（P.28）と述べている。茂吉短歌に続いて、杜夫は高村光太郎の詩を愛唱するようになり、『智恵子抄』の中でも甘いものから次第に力強いものに惹かれていった。そして、自身の青年期のナイーブで感傷的な心情を、抒情性豊かな短歌や詩に表現していたことから、マンへの自己認識は当を得ていると思われる。とは言え、杜夫は『どくとるマンボウ青春期』や『幽霊』にマンに関わっては具体的な叙述を残しており、その偏愛の足跡をた

どることが出来る。一方、リルケについてはそれらの著書に具体的な記述が見あたらない。

リルケは当初『初期詩集』の「天使の唄」「少女群像」「少女たちの歌」等、感傷的・夢想的で甘美な韻律をもつ抒情的な詩を発表していた。しかし、ロシア旅行を経て、ロダン（François-Auguste-René Rodin）との交流を通じて『形象詩集』『時禱集』そして『新詩集』と、汎神論的な自然感情の表現へと変化していった。『マルテの手記』はその頃に執筆された。先の論考では、高安國世の「リルケの生涯」（『鑑賞世界名詩選 リルケ』（筑摩書房））に触れながら、茂吉の「寫生の説」における「實相に観入して自然・自己一元の生を寫す」と、ロダンや高村光太郎の自然観、リルケにおけるヤコブセン（Jens Peter Jacobsen）からの「自我を解き放つて万象と一つになつて」いく「主客合一」の芸術観等に共通の視点を指摘し、杜夫がリルケに惹かれていった理由の一つとして考察した。

『幽霊』は、その「あとがき」（『幽霊』中央公論社、昭43）にあるように、杜夫の二十三歳から、二十七歳頃の最初の長篇小説である。「昭和二十五年に書き出され、昭和二十七年から翌年へかけて雑誌『文芸首都』に分載」し、昭和二十九年に母輝子に出版費用を工面してもらい、文芸首都社刊の名義により単行本として自費出版された作品である。しかし、「年譜」（斎藤国夫、『北杜夫全集 第

十五卷』によると、七百五十部出版され、当時は書店の店頭にも出たが、ほとんど返品されたという。その後、『幽霊』は昭和三十五年に中央公論社よりまとまった部数が刊行されたが絶版、文庫本のみであった。しかし読者から単行本をという声があり、昭和四十三年に再刊された経緯がある。

ところで、杜夫は最晩年のエッセー「恐ろしい娘によるリハビリティ私の認知症」（『マンボウ最後の家族旅行』実業之日本社刊）で松本高校時代の望月市恵を回想し思い出を語りつつさりげなく以下のように『幽霊』執筆の舞台裏を吐露している。

私たち幾人かの望月先生の信奉者は、先生のお宅などでもトーマス・マンやリルケの話を聞かされた。リルケといえば私の最初の長篇『幽霊』は、かなりリルケの『マルテの手記』の影響を受けているのである。（傍点引用者）（P.101）

また、奥野健男との対談「ぼくらの文学奇談」（『別冊新評「北杜夫の世界」新評社）では、『楡家の人びと』についてはマンの『ブッデンブローク家の人びと』の影響を認めただうえで、「『幽霊』「木精」は別にトーマス・マンを下敷きにしたという作品ではないですね」（P.83）と自ら語っている。確かに、辻邦生が「解説」（『幽霊』角川文庫）で述べるように『幽霊』本文中にマン体験を描き、副詞や形容詞を重ねる「マンふうの批評的分析な語句」に影響を見出すことはできる。しかし、こうした叙述はやはり当時の杜夫らしい抒情的文体とは異なるマンの文体への憧憬から描かれたものであると考えるのが妥当と思われる。

本論考では、先の『幽霊』は、かなりリルケの『マルテの手記』

の影響を受けているのである」に着目し、『マルテの手記』と『幽霊』の対比を通して、杜夫が『マルテの手記』をどのように享受し、『幽霊』に取り入れていったかを考察していくこととする。そこで、今後作品に即して類似点や相違点を調べて『幽霊』の特色を解明する対比研究を進めていく前段階として、「其の一」ではまず、対比に向けて日記や書簡、関連著書等にあたり、影響の証拠を立証しておきたい。とりわけリルケと杜夫を結びつける媒介者について、その根拠を示しながら特定し、杜夫が媒介者とどういつながりを持ち、何をどのように学んでいったのかについて考察していくこととする。更には、題名『幽霊』について、本論考に関連する基本情報をひとまずめぐっておきたい。

一、「日記」に見られる影響の証拠

『或る青春の日記』（以下「日記」と略記）は、杜夫の東北大学時代（昭和二十三年～昭和二十八年）を伝える貴重な日記であるが、二度の出版を経てその全貌が明らかになった日記である。その初出、「昭和六三（一九八八）年版」（単行本『或る青春の日記』（中央公論社、昭和63・11・7））の末尾ページには、「中央公論文芸特集」（一九八七年春季号～一九八八年夏季号）に掲載」とあり、本文中には以下のような「付記」があることから、初出段階と一度目の出版では「日記十二」が抜け落ちていたことが明らかである。

〔付記〕「日記」十二（大学にはいつてから三冊目）が見つからないので、それまでの詩のうち高校時代のものを含めて主だったものを書く。なかには「文学集団」「詩学」に投稿して活字に

したものだけを集めた「北杜夫全集」1に収めたものもまじっている。(単行本『或る青春の日記』(P.200))

その後出版された二度目の「平成四(1992)年版」(文庫版『或る青春の日記』(中央公論社、平成4・11・25))の末尾ページには、「本書は『或る青春の日記』(一九八八年十一月、中央公論社)に、紛失していた二冊のノート、昭和二十四年一月十七日～四月十六日の日記を付け加えた、東北大学時代の全日記です」と記され、二度目の出版により、ようやく完結した日記であったと理解できる。

また、両「日記」を比較し精読すると、二度目の「平成四年版」には「昭和二十四年一月十七日～四月十六日」以外にも、七月の「童心」や八月の「天蛾」「刻印」等、新たに加えられた詩があり、そこにも修正の跡がみられる。本論考では二度目の完結版「平成四(1992)年版」(文庫版『或る青春の日記』)を研究資料として考察を進めていくこととする。本「日記」は、杜夫の日常の諸事や作家として自己を形成していこうとする純粹な内面の足跡であり、杜夫の精神の生地が赤裸々に記された貴重な一冊であると考ええる。

「日記」には、「リルケ」に直接関連する記述が以下のように七箇所みられる。『幽霊』執筆に関わるリルケの影響を考察するうえで重要な内容を含んでいると考え、以下に執筆時の状況を補足し、年代順に列挙する。

「日記」1(昭和23)——一回目の松本行、松本滞在中。

僕はいま伴の家の庭にいる(中略)僕は「山河あり」という句を何とはなしにくりかえしていた。そう、山河があった。忘

却の淵に沈み、やがて浮かんでくるであろう山河が。そしてリルケの言葉をかみしめていた。ここに白い梅がある。老いたサフランと未来へのヒヤシンスがある。水仙の黄いろが純潔だ。そしてまた何となく僕はリルケとつぶやく。見あぐれば空は驚くほど大きく、山の向うのくすんだ色が次第に浸してゆく水色の中を、鳥の影が横切る。(後略)(「四月八日」)(P.11-12)

「日記」2(昭和23)——一回目の松本行、松本滞在中。

リルケについて。「運命を持たぬことが僕の運命です」と言った詩人。彼は生活が運命より偉大な如くロダンから仕事を学んだ。「貧しさは内から射すうつくしい光だ」と歌う詩人の瞳は限りなく澄み切っていたに違いない。カスナアが「純粹から偉大へゆくには、一度犠牲をとらねばならぬ」と言ったのをリルケは肯定し、また否定した。僕はおもう。純粹な愛と言うものを。人間のせつなさいじらしさと言うものを。「するどいけれども何をみているかわからぬ眼」(カロツサ)を持ったこの詩人は忘却を信じていた。記憶が名のないものとなり、僕ら自身と区別がつかなくなつて、一篇の詩はぼつかり生れてくると言う。「すべてのものが僕のこころの底ふかくしずんでゆく。普段そこが行きづまりになるはずのへんを容赦なく突きぬけて、深い僕の知らぬ奥底へながれてゆく」と「マルテの手記」に書いた彼、ヴァレリーがミュゾットの山荘に閉じこもる彼を、「あなたは純粹な時間のなかに閉じこもるかとおみえた。おなじような日々をならべて、その向こうにはつきり死をのぞかせておくような」と表現するように。ノルウエーの作家オプストフェル

ダアをモデルにしたマルテ・ラウリッツ・ブリッゲと言う人をつくりあげた彼は、その仕事に身をはがれたのだろう。リルケがローマの庭園で見たというアネモネの狂おしさを僕は思う。暗黒の人知れぬ昇天であるマルテの苦しみを、かたつむりに例えたサロメの言葉を思う。途方もない孤独。信仰と言う言葉を使う必要のなかった彼。キリストのために強いて自分を悪人にしたとは思わないと言った彼。ジイドのところでダールム辞典の「手」の項を見てドイツ語に掌を表わす言葉のないのにびっくりする彼。

「僕がこの世にのこした多くの肖像のうちで、最も大切なのは、一人一人の友人の記憶と感性にきざまれた、はかない、消えやすい僕のおもかげにほかならぬ」——彼の遺書。ばらのとげで彼は死んだ。一八七五年十二月四日、プラーゲに生れ、一九二六年十二月二十九日午前五時に死んだこのもつとも純粋な詩人リルケを、僕は心から思うのである、慕うのである。

創元社 大山定一「リルケ雑記」二度読了。(「四月十日」)
(PP.14-15)

「日記」3 (昭和23) — 一回目の松本行、松本滞在中。

(前略) 過ぎ去ったものよ。忘却を、僕も信じよう。文字文字の影もうすれ、記憶もかすんでしまい、そんな時にふいと君や君のおもかげの浮ぶ時、僕は一篇の詩が作れるだろう。

捨てて来しいのちかなしくよみがへる

夜半のひととき 風立つらしも

こんな歌を昔の日記を見ながら記すようになるだろう。その時まで、がつきがつきと歩みたい。仕事をしたい。(中略)

あけくれの忘却さへもかりそめと

おもほえなくに 白き日のぼる

こう歌ったのは去年の初冬だったな。日が日に重なる。月が次第にはがれ、そして時が何時の間にか来り去る。今忘却を思うは力である。今、リルケ、光太郎を思うは力である。(傍点引用者)(「四月十一日」)(PP.16-18)

「日記」4 (昭和23) — 仙台伊達宅へ引越し翌々日、友人と松島へ。

リルケの言う偉大なる女なぞちよつとこの世にはいそうもないようだ。(「六月二十二日」)(P.150)

「日記」5 (昭和24) — 四回目の松本行から仙台に戻り五日目、「望月市恵という」月先生論「冒頭」。

望月市恵という「リルケは主観を現わす客体を外界に求めたのですよ、エヘヘ」と語る男は、言うまでもなく、次のような人物とみてひがめではないから、順序をかまわず少しばかり並べることにする(後略)。(傍点杜夫)(「一月二十二日」)(P.250)

「日記」6 (昭和25) — 箱根滞在(三度目)時の茂吉の世話を終え、

仙台に戻った時、「幽霊」執筆直前。

帰仙。車中で読んだ「マルテの手記」の強烈なシヨック、今も忘れず、ケンキョになりたい。僕は下手だ。うまくならない。いいものを書きたい。(傍点引用者)(九月十六日)(P.515)

「日記」7(昭和25)―「幽霊」執筆開始時(九回目の松本行の直後)。

「二、三日前から「幽霊」という短篇を書きだした。(註。この長篇は初め母が家出するまでの短篇として書きだされ、次第にふくれあがって長篇となったものである。)'「マルテ」の影響が大きい。良いものができそうだ。」(傍点引用者)(十一月七日)(P.520)

以上は直接「リルケ」に関連する記述の引用であるが、これらの「日記」の内容と類似・相関するような記述を、杜夫が初期の掌篇「狂詩」を書き出すころ、昭和二十三年前半の「日記」のところどころに見出すことができ、いずれもリルケの詩作や芸術に対する思念に関連する記述である。七箇所の「日記」に加え、これらも杜夫がリルケを享受しつつ、徐々に初期作品の執筆を進めていった足跡であると考える。また、その後『幽霊』執筆に向かつていった一つの方向性を示唆する重要な内容であるとも考える。以下にその一部を五箇所引用しておく。

・「僕は忘れよう。そして、一つの悲しい物語を書き残そう」

(昭23・5・26)

- ・「忘却の中からふと浮んできたものが、この言葉をもっともよく生かしてくれる」(昭23・5・31)
- ・「恐ろしい孤独」(昭23・6・5)
- ・「すべてのものからかうして離れてしまった時に／想ひ出ははじめて美しさを持つたらう／忘れ果てようとつとめ 忘れられないと涙を流し／そして何時の日か 文学のみがこの心を伝えるだろう」(昭23・6・2)
- ・「ものを見ることを学ぶ」(昭23・6・7)

二、「日記」から見えてくること

昭和二十三年、東北大学一年時に杜夫は松本の地を四回訪ねた(詳細は「(1) 書簡の解的側面」(「松本時代の北杜夫 其の三」参照)。特に初回は、杜夫にとって印象が強いものであったと察する。松本への強い郷愁に駆られ、信州の自然や友人、後輩、恩師らとの再会に胸をふくらませていたことであろう。しかし、その実際の体験は、否応なしに過去への郷愁と孤独感を一層強める結果となっていた。寮の新入生歓迎コンパに参加し、「騒々しさはもう、僕の若さをよみがえらせてくれない」(『どくとるマンボウ青春期』)、「途方もない孤独と人は言うが、やっぱりほのかなもの同士のつながりを、そこはかかない因果を、僕は信じないわけにいかない」(「日記」「四月十一日」(P.16))と記した。募る孤独感は杜夫の抒情性を一層強め、「四月十三日」の「日記」は以下のような心の叫びとなった。

稚さと若さの住んだ町の手もつけられないなつかしき、うれしさ、ほのかさ、そうして見なれた、歩きなれた道ととききつている学校と、心に残り、また残したであろうそんな人々。そう、そうだ。僕は、僕はほんとうに、もう帰りたくない。(P.10)

更に松本を去る「四月十八日」は「なつかしかった信州よ、僕の若さのすてどころよ、しばし、さようなら。感情は理性を麻痺させる」(P.22)と万感の思いを記している。当時のこうした情況をみると、東北大学一年時の杜夫の当面の課題は、松本時代の失われた過去を追憶せざるをえない自分自身であったであろうことが浮かんでくる。

そうした杜夫が「リルケの言葉をかみしめていた」(日記1)と記すそのリルケの言葉とは、いかなる言葉であったのであろうか。『マルテの手記』の第一部の前半には、「見ることから学び始めた」マルテの心に浮かんだ創作に対する一つの思念が描かれた叙述がある。またその後、「見ることから学び始めたのだから」と自分の仕事として少年時代の病気の思い出を追憶し、マルテが「詩」(追憶)について考察した叙述がある。それぞれ先の「日記」の内容と重なる意味内容をもっており、当時の杜夫がかみしめたであろうリルケの言葉であったと考えられる。以下にその二箇所を引用する。

僕はまずここで見ることから学んでゆくつもりだ。なんのせいかわからないが、すべてのものが僕の心の底に深く沈んでゆく。ふだんそこが行詰りになるところで決して止らぬのだ。僕には僕の知らない奥底がある。すべてのものが、いまその知らない奥底へ流れ落ちてゆく。そこでどんなことが起るか、僕

にちつともわからない。(傍点引用者) (『リルケ全集第四巻』(P.8))

追憶を持つだけなら、一向なんの足しにもならぬのだ。追憶が多くなれば、次にはそれを忘却することができねばならぬだろう。そして、再び思い出が帰るのを待つ大きな忍耐がいるのだ。思い出だけならなんの足しにもなりはせぬ。追憶が僕らの血となり、目となり、表情となり、名前のわからぬものとなり、もはや僕ら自身と区別することができなくなつて、初めてふとした偶然に、一編の詩の最初の言葉は、それら思い出の真ん中に思い出の陰からぼっかり生れてくるのだ。(傍点引用者) (『リルケ全集第四巻』(P.21))

杜夫が着目したと思われるこれらの『マルテの手記』の叙述は、リルケが「一篇の詩」が生まれるプロセスを述べたものである。見たものが心の奥底に流れ落ちてゆき、一旦記憶(思い出)となる。次に、追憶した過去を忘却した後、忍耐の果てにふとした偶然にぼっかりと再び蘇ってくる最初の言葉こそ、詩の誕生であるとしている。「日記1」「日記2」「日記3」には、こうしたリルケの詩作品誕生の思念に対する杜夫の享受の様子がよく表現されていると考える。

「日記1」の「山河があった。忘却の淵に沈み、やがて浮かんでくるであろう山河が」は、リルケの「詩」(追憶)の思念を積極的に理解したうえで共感的、追体験的な記述となっている。「追憶」「忘却」の後、「ふとした偶然に、一編の詩の最初の言葉は、それら思い出の真ん中に思い出の陰からぼっかり生れてくるのだ」と、松本を訪れた杜夫が共感し、信州の「山河」に当てはめ享受して記し

たものと考える。

「日記2」の「記憶が名のないものとなり、僕ら自身と区別がつかなくなつて、一篇の詩はぼつかり生れてくると言つ。「すべてのものが僕のこころの底ふかくしずんでゆく。普段そこが行きづまりになるはずのへんを容赦なく突きぬけて、深い僕の知らぬ奥底へながれてゆく」は、まさに先の「見ることから学び始めた」と言うリルケが『マルテの手記』に描いた思念をほぼそのまま引用していることが分かる。

そして「日記3」の「過ぎ去つたものよ。忘却を、僕も信じよう(中略)ふいと君や君のおもかけの浮ぶ時、僕は一篇の詩が作れるだろう」は、マルテの「詩」(「追憶」)についての考察「次にはそれを忘却することができねばならぬだろう。そして、再び思い出が帰るのを待つ大きな忍耐がいるのだ」を自ら信じ実践し、表現していることとする杜夫の意志の現れとも読みとれる。更に「日記3」には、自らの短歌を添えたことから決意のほどが窺える。また、「日記3」には「今、リルケ、光太郎を思うは力である」と記していることから、リルケの敬愛したロダン、ロダンを師と仰いだ光太郎への、ひと連なりの熱い敬慕も見えてくる。

昭和二十三年の四月、五月、六月の「日記」にはロダンや光太郎に寄せる思いが度々記されている。「日記」の冒頭「四月四日」は、「Arbeit」から始まる四連の詩が記され、当時の杜夫の創作活動への思いが描かれている。詩の四連目は、「俺はペンをはふり出す(中略)醜態するのを頼んでゐる/溢れみなぎるのを期してゐる/詩はたまりかねた嘔吐だ(中略)悲しいArbeitの足跡だ」と結んでいる。この「Arbeit」(独、仕事)はリルケがロダンから学んだ芸術創作の基本姿勢の「手仕事」(Handwerk)、「仕事」であり、リルケは

「美術論Iロダン」の講演で繰り返し克明に論じた。杜夫はその「手仕事」を「Arbeit」として自らの詩に描いたものと考えられる。この頃の「日記」には「仕事」、「リルケ」、「ロダン」、「光太郎」等の記述が多く、その傾倒ぶりが理解できる。主なところを以下に引用する。

がっきがつきと歩みたい。仕事をしたい。(四月十一日)
(P.17)

「のろいという事は一つの美です」——ロダン「手仕事しかありません。手仕事がすべてです」なんと痛い言葉を発するのだ、この彫刻家は。僕は「木っ葉童子」として光太郎に向うのだろうか。(四月二十日)(P.23)

生産しろ。がっちがっちと言葉を固める。純粹に突きすすめ。死物狂いとなつたお前を見たいものだ。仕事をしろ。毎日毎日書きためる。(五月十日)(P.36)

だつてしょうがないんだ。茂吉と、光太郎と、海の向うのあんな人々がいた以上は。(五月十六日「断章」)(P.50)

冷たいポストの入口に、厚い、その運命の封筒を差入れ、ちよつとその重さを手先にのせたのち、ポトンと落つことした(中略)(註。この封筒というのは高村光太郎に詩を見て貰おうと出した手紙(後略))。(五月十八日)(PP.61-62)

電車を待ちながら、リルケの「ロダン」を取り出して読んだ。——英雄とは動かし難く集中せられたる者を言う（エースマン）。そんな言葉が扉にあった。（中略）小都会の電車通りの風景が、何かしらロダンの持った孤独を思わせた。黙々と堪え抜く力。（六月一日）（P.102）

「日記4」の「偉大なる女」は、リルケが『愛の女たち』『偉大なる恋する女たち』『愛する女』等と名づけた女性像を指していると考えられる。これは『マルテの手記』の中にも、清らかな一筋の愛に生き愛に死んだ女性の魂の深い美しさとして描かれた。またこれらの女性の姿は、リルケの言う「能動の愛」であり、リルケにとって「愛することは、永遠の持続だ」という芸術活動の理想でもあった。「日記4」は『マルテの手記』のこの「愛の女たち」のフィルターを通して杜夫が当時の現実を見て、当面している状況について感じたことを率直に表現したものと考えられる。

さて、「日記5」は恩師望月市恵への親しみと尊敬が読み取れ、先のリルケへの憧憬が翌年も継続していたことがわかる。「日記6」「日記7」は『幽霊』執筆直前と執筆開始時であるが、「日記6」の「マルテの手記」の強烈なショック、今も忘れず、ケンキョになりたいには、『幽霊』執筆に向けてのモチベーションを、改めて『マルテの手記』から感じ取っている様子が窺える。「日記7」には、執筆開始時に、杜夫自ら「マルテ」の影響が大きい」と記している。以上のように、これらの「日記」はそれぞれリルケの影響を証明する貴重な証拠資料になっていると考える。

三、二人の媒介者

1 望月 市恵

杜夫にトーマス・マンやリルケへの道を開いた第一の媒介者とも言える松本高校時代のドイツ語の恩師、望月市恵との出会いについては、先の論考「4 精神的青春期」に述べた。

望月市恵（1901・1・25～1991・9・8）は、長野県南安曇郡穂高町（現安曇野市）出身、杜夫の松本高校の先輩にあたる。文科乙類を卒業後、東京帝国大学文学部独文科卒、立教大学予科教授、静岡高等学校教授、第一高等学校教授、松本高等学校教授のち信州大学教授を歴任し、退官して名誉教授となった。多くのドイツ文学を翻訳し、訳書にはマンの『魔の山』『ブッテンブローク家の人びと』、リルケの『マルテの手記』など堅牢な翻訳が数多くある。杜夫が、当時手に取ったと思われる望月訳『マルテの手記』は現在信州大学附属中央図書館書庫に収蔵されている（資料9 信大書庫B）（松本時代の北杜夫 其の四（資料編）——初期作品関連資料——）参照）。杜夫をはじめ多くの松本高校生は望月を慕い、その翻訳を手に取り、度々穂高の自宅を訪ねた。望月は、ドイツ文学者の小塩節や映画監督の熊井啓らにも影響を与え、松本高校生に愛された名物教授であったという。

中でも杜夫の望月への敬愛の念は並々ならぬものがあつたと察する。『どくどくマンボウ青春記』にはその出会いを記し、『幽霊』をはじめ、「日記」「若き日の友情——辻邦生・北杜夫往復書簡」「人生のずる休み」「最初の酒乱」（『北杜夫全集第15巻』P.234）等、数多くの作品にその人柄を描き、そして常に感謝の念を抱きながら唯一無二のつながりを記した。

『幽霊』の「第四章」では、「学校の図書館の書庫においての出来

「事」の挿話として、父の書籍の記憶と折り合わせ、「独逸語の教授」とのやりとりが描かれた。ここでは、独逸語研究会に出席した主人公「僕」が、『地獄めぐり』の「Tief ist Brunnen der Vergangenheit. (過去という泉は深い)」(『幽霊』P220)の一行と出会っていくプロローグとして望月と思しき人物を登場させている。

また、先に引用したエッセー『人生のずる休み』では、『幽霊』は、かなりリルケの『マルテの手記』の影響を受けているのである」の告白の前に、以下の回想が記され、そこには望月への杜夫の感謝の念と二人の深い師弟愛が滲みでている。

最近よく思い出すのは旧制松本高校時代のドイツ語の先生、望月市恵先生のことである。先生はただドイツ語を教えられるだけではなく、人間的な生き方を教えられたと思う。

私が信州大町の軍需工場、昭和電工の工場に学徒動員として行っていた時そこで終戦を迎えた。その時に私が詠んだ短歌、「星空のいつくしきかもおのづから 涙あふれつ 国破れたり」を大きな紙に私に書かせ、それをきちんと表装されて私が訪ねて行くと部屋にかけておられた。(P56)

一方、望月は「松本高等学校時代の北杜夫君」(『北杜夫の世界』(新評社))に、当時の杜夫の思い出を記している。昭和二十一年四月、望月が松本高校に赴任したころの杜夫(理科乙類)の印象は、「とにかく北杜夫君は、好奇心の強い生徒」であったとし、いくつかのエピソードを紹介している。西寮の総務委員として校友会活動に忙しく、「授業が始まって大分過ぎてから、忙しそうに入ってくるが多かった」こと。ドイツ語のテキスト『水晶』(シュティ

フター)の一部を五七調に訳してきたこと。校友会の新旧委員長交替の席上で酔って望月の頭を「自由のために擲った」こと。杜夫が卒業時に、四人の友人と禪一つで望月を担ぎあげ庭に出て、「デカシヨ踊りを踊ってみせてくれたこと」。杜夫の進路について、動物学と精神医学のどちらを選択すべきかと相談を受けたこと等、極親しい恩師でなければ語れない青年杜夫の貴重な一面が紡がれている。また文末には、杜夫の文学の要素として『楡家の人びと』の叙事性と、『幽霊』の抒情性を挙げながら、マンボウもののユーモアは両方にちらばっていると、懇にして適切な寸評を添え結んでいる。

さて、「日記」を見ると、杜夫の望月宅訪問は仙台に行ってからも続いていたことが分かる。そこで、その実際の状況を明らかにし、杜夫は望月からどのようなことを学んだのか、またそれは何のためであったのか、「日記」から考察しておきたい。

昭和二十三年(東北大学医学部一年)から昭和二十八年(同大学附属病院インターン)までの「日記」を精読すると、望月に関連する記述は二十三箇所を確認することができる。杜夫はこの間、松本を十一回訪ねており、そのうち九回は望月と何らかの具体的接触をとっている。その内訳は自宅訪問五回(宿泊四回)、対談・授業出席・宴席等四回である。このことから、杜夫は松本行の際は、ほぼ毎回望月と対話をし、教えを乞うていたことが窺える。尚、望月と接触のなかった二回は、昭和二十五年十一月の「幽霊」執筆開始前の八回目の松本行(7・8・7・24)と、九回目の松本行(10・23・10・29)である。いずれも北アルプス方面の登山や三城牧場方面の散策についての内容であり、作品執筆に必要なとなった取材目的の松本行であったと考えられる。

これら二十三箇所の「日記」にしばしば添えられる言葉は、「この

ような先生を持つ幸せは大きい」「幸福な気持でお宅を辞す」「何と
いう有難さ、よき師であろう」「いい先生だ、とにもかくにも」「つ
くづくいい先生だと思つた」等、望月を師として学べる喜びと幸福
敬愛、感謝の言葉である。先の晩年の杜夫の言葉のように、杜夫は
望月の人間味あふれる対応に再会の度ごとに感激し、心の底から望
月を信頼し、師と仰いだものと受けとめられる。当時、杜夫は望月
とどんな話をし、何を学び得たのであろうか。その具体的内容はあ
まり記されていないが、「日記」のどこどころの記述を結びながら
以下に考察する。

まず、望月に関連する「日記」の内容で最も多く書かれたことは、
当時杜夫が求めたマンの情報である。どちらかというと言情的要素
が強かった当時の杜夫が、マンの堅牢な叙事的文体とその物語性に
憧れ、強く惹かれ、それを学びとろうとしていた姿が見えてくる。
昭和二十三年八月十四日の「日記」には、以下の「註」（出版時の
「註」、筆者記）が添えられている。

（註。また敗戦からほど遠からぬ頃で、マンの動静もほとんど
伝わってこなかった。以前のマンの原書も入手できなかったか
ら、私は松高へ行くたびに図書館や望月先生から本を借りて、
自分の訳本に好きな箇所を書きこんだ。）（P.196）

二回目の松本行（昭23・7・12～7・21）では訪問の際、牛肉を
ご馳走になり、マンの「人生略図」を借りている。その後、茂吉の
箱根行（7・26～8・28）に同行し、「人生略図」を抜書したとする
「日記」の記述が四回（7/30・8/11・8/13・8/14）あり、その熱
意のほどが窺える。

次に注目したい内容は、作品執筆に向けての取材的な内容であ
る。昭和二十五年一月十八日の「日記」には、「ギリシヤに狐がいま
すかねえ」（7回目松本行）と望月ら数名の教授に尋ねたとあるが、
文末の「註」（出版時「註」、筆者記）には、「ギリシヤにキツネがい
るかないかは、「牧神の午後」の取材」とある。実際、それから一
カ月後の二月十七日には「牧神の午後」を書き始む」と記されてお
り、取材が目的の一つになっていたことが明らかである。また、同
年七月（8回目松本行）と十月（9回目松本行）の松本行では、北
アルプス（燕岳・槍ヶ岳・上高地・徳本峠）方面や三城牧場方面に
足を運んでいる。この二度の松本行の前後を見ると、「少年」や「幽
霊」の執筆時期と重なっていることが分かる。同年六月二十九日に
は「少年」というテーマを思いついてニコニコしている（P.490）、
七月二十八日には「くらい電気の下で「少年」を書く」（P.492）と
ある。そして、「少年」着想からほぼ一年後の昭和二十六年六月六
日には「今日、「少年」八十八枚やつと書きあげた」と記している。
また、九回目の松本行の後、昭和二十五年十一月七日には「二三
日前から「幽霊」という短篇を書きだした」（P.520）とある。よっ
て、この時期の二度の松本行は「少年」「幽霊」に共通するクライ
マックスとなる主人公「僕」がアルプスで覚醒していく場面の取材
であった可能性が大きいと考えられ、望月との接触は特に記されて
いない。

昭和二十四年、杜夫流「望月市恵論」に「リルケは主観を現わす
客体を外界に求めたのですよ、エへへ」と語る男」と書き、マン
の著書を借り、抜書したように、杜夫は望月からリルケやマンにつ
いて学んだ。特に、今回望月に関連する「日記」を見る限りでは、
杜夫がマンについて学ぼうとする際の媒介者としての望月の助言や

援助が濃厚であった。現在のところ、二人の間に交わされた書簡等関係資料が未公開であり、更なる内容の考察は今後の研究課題としたい。

尚、『幽霊』第四章の学校の図書館の挿話に、「ヨゼフはありませぬね。誰か借出していつてるのでせう」と教授がいつた」(P.219)、「Tief ist Brunnen der Vergangenheit.(過去といふ泉は深い)」(P.220)等、トーマス・マンの『ヨセフとその兄弟』を作品素材として描き、望月と思われるドイツ語の教授を登場させていることは、『マルテの手記』と『幽霊』の対比研究を進めていくにあたり、杜夫の獨創性を考察するうえで重要な視点であると指摘しておきたい。

2 大山 定一

杜夫をリルケに導いた第二の媒介者はゲーテやリルケの翻訳者で、ドイツ文学者の大山定一であると考えられる。その理由は、先の「日記2」の末尾に「創元社 大山定一「リルケ雑記」二度読了」と記され、『リルケ雑記』に書かれた『マルテの手記』の「詩」(「追憶」)や「愛する女」等についてのリルケの思念が、「日記」(1・2・3・4)の各内容と、共通(引用)または類似している箇所が多いからである。そこには、杜夫が熱心に『リルケ雑記』(創元社)を読んだ形跡が見られ、大山の著書を通してリルケの芸術観を学び享受していった当時の杜夫の様子を読みとることができる。

『リルケ雑記』は「百花文庫」の30番として刊行された。その「巻末小記」には、「いつになれば「リルケ研究」を書きあげるか確かな目當てのない僕は、一應こんなかたちでいままでの仕事をまとめてみたのである」(P.145)と記されていることから、大山のリルケ研究の要諦をまとめた一冊であることがわかる。本書は以下のように

全九章から構成されている。1「リルケの薔薇」、2「愛の女」たち、3「リルケ雑記」、4「マルテの手記」跋、5「リルケ小論」、6「友への手紙」、7「靈感について」、8「詩の位置」、9「動物詩について」である。

また大山に関連しては、昭和二十三年二度目の松本行の前日、一旦帰京し、散歩から帰って荷造りをした際、「日記」には以下の記述がある。

帰ってきて、信州への荷を整える。マンの作品二三、評論二、三、その中には今日見つけて嬉しかった大山定一の「作家の歩みについて」がある。(昭和23・7・11)(P.170)

『作家の歩みについて——トオマス・マン覚書——』(甲文社)に関連する直接の引用等はそれ以降の「日記」には見あたらない。しかし、本書はトーマス・マン論を中心とした全七章からなる文学論であり、第二章には「リルケとマン」、第五章には「知性について——トオマス・マンとリルケ」も論じられている。当時の杜夫が探し求めていた一冊であり、杜夫はこの出会いを「今日見つけて嬉しかった」と率直に記しており、大山への関心の高さが窺える。

大山定一(1904・4・30～1974・7・1)は、香川県出身のドイツ文学者であり、京都大学名誉教授を歴任した。その経歴は、旧制第六高等学校卒業後、京都帝国大学文学部独文学科に進学。卒業後は、旧制第三高等学校講師、京都帝国大学文学部講師、法政大学予科講師などの後、京都大学文学部助教授、同教授となった。京都大学を退官後は関西学院大学教授を務めた。翻訳には、『マルテ・ラウリツ・ブリッゲの手記』(白水社)、『リルケ選集全4巻』(共編

訳新潮社)、『ゲーテ詩集』(創元選書)などがある。また著書には、当時杜夫が手にした『リルケ雑記』や『作家の歩みについて——トオマス・マン覚書——』等がある。

さて、大山を第二の媒介者として確定する具体的な根拠を考察すべく、「日記1」から「日記4」について『リルケ雑記』との照合を進めていくこととする。

「日記1」には、直接的な『リルケ雑記』の叙述は見あたらない。しかし、リルケのフィルターを通した杜夫の視線は、信州松本の「山河」から、親友の「伴の家の庭」へと移り、早咲きの「白い梅」の花、「老いたサフラン」、「未来へのヒヤシンス」、そして、純潔な「水仙の黄いろ」へと焦点が絞られていき、「また何となく僕はリルケと『ぶやく』にいたっている。スイセンの学名Narcissusは、ギリシャ神話に登場する美少年ナルキッソス(ナルシス)に由来する。水に映った己の姿に恋い焦がれ、ついには水仙になった美少年の物語である。リルケには「ナルシス」(『リルケ全集第二巻』Pp.293-298)という詩がある。ナルシスが彼女(エコー(Echo)、木霊)を思いうかべ、水面を「我を忘れて見つめる」とき、「甘い恐怖」を抱き、ナルシスは死を迎える。リルケは更に詩の中で、ナルシスが「自分から出て また自分のなかへ帰って来たものを」愛したと、ナルシスが死んだ後も描いている。

リルケは「アネモネの花」(「ルウ・アンドレアス・ザロメへの手紙」)に自らの心境を重ねて描き(『リルケ雑記』4 「マルテの手記」跋)、また、「薔薇の一すぢな純粹さ」(『リルケ雑記』2 「愛の女」たち)を描いた。杜夫もまた当時、リルケの「アネモネ」や「薔薇」「ナルシス」を連想し、「水仙の黄色」を「日記」に記したものと考えられる。

「日記2」は、杜夫が『リルケ雑記』を読んだ際、共感し享受した内容を抽出した覚え書きとも思えるほど、『リルケ雑記』の叙述がそのまま記されている箇所が多く目につく。そこで、本論考では「日記2」を内容ごとに12項に分け、それぞれが『リルケ雑記』のどの章のどの考察と同一性(引用)、類似性があるかを照査し対比的に示し、媒介者特定の具体的根拠として提示しておくこととする(『リルケ雑記』は「雑記」と略記、文末に章題(頁)。

1項 「運命を持たぬことが僕の運命です」と言った詩人。」

「雑記」 「運命を持たぬことが僕の運命です」とリルケはいつてゐる。(2 「愛の女」たち (P.18)、5 「リルケ小論」 (Pp.71-72))

2項 「彼は生活が運命より偉大な如くロダンから仕事を学んだ。」

「雑記」 「リルケの「マルテの手記」のなかにある次のような文章がふと頭に浮んでくる。「運命というものは好んで唐草模様や色模様を織りださうとする。(中略)たとへば生活が運命より偉大なやうに。……」(2 「愛の女」たち (Pp.17-18))

「仕事、仕事」と口ぐせのやうに言ひつづけ彫刻からわき目もふらぬロダンの生活」(5 「リルケ小論」 (P.68))

3項 「貧しさは内から射すうつくしい光だ」と歌う詩人の瞳は限りなく澄み切っていたに違いない。」

「雑記」 「リルケの眼は一瞬も美と純粹から離れようとはしなかつた。(中略)「なぜなら、貧しさは内から射すうつくしい光だ」

と歌つたのがリルケである。」(2 「愛の女」たち (P.19)、
3 「リルケ雑記」 (P.39))

4項 「カスナアが「純粹から偉大へゆくには、一度犠牲をとらねばならぬ」と言つたのをリルケは肯定し、また否定した。僕はおもう。純粹な愛と言ふものを。人間のせつなさいじらしさと言ふものを。」

「雑記」リルケは晩年、彼の親しい友人であつたカスナアの「純粹から偉大へゆく道は、ただ一つしかない。それは犠牲の道である」といふ言葉を書きとつて、この言葉は僕を代辨してくれらると同時に、この言葉は僕を反駁してゐるかもしれぬと述べた。リルケは純粹なものが何か或る偉大に到達するのにはかならず一つの犠牲をとほらねばならぬことを知つてゐた。」
(2 「愛の女」たち (P.23))

5項 「するどいけれども何を見ているかわからぬ眼」(カロッサ) を持つたこの詩人は忘却を信じていた。」

「雑記」「カロッサが「するどいが、何をみてゐるかわからぬ眼」といふ言葉で素描した、瘦身の、疲労困憊のかげをおびた、いたいたしいリルケの肖像である。」(6 「友への手紙」 (P.89))

「マルテの手記」にあるやうに、彼は忘却を信じ切つてゐたのにちがひない。忘却をくぐつて泛んでくるもののみが眞實の感動であることを、彼は何の不安もなしに信じた。」(9 「動物詩について」 (P.139))

6項 「記憶が名のないものとなり、僕ら自身と区別がつかなくなつて、一篇の詩はぽっかり生れてくると言う。」

「雑記」「記憶が僕らの血となり、僕らの眼となり、僕らの表情となり、もはや名のないものとなり、僕ら自身と區別のつかぬものとなつて、初めて何かふとした偶然に、一篇の詩は記憶の影のなかからぽっかり生れてくるのだ。リルケは「マルテの手記」のなかでそんな意味のことを述べてゐた。」(3 「リルケ雑記」 (P.30-31))

7項 「すべてのものが僕のこころの底ふかくしずんでゆく。普段そこが行きつまりになるはずのへんを容赦なく突きぬけて、深い僕の知らぬ奥底へながれてゆく」と「マルテの手記」に書いた彼、」

「雑記」「すべてのものが僕のこころの底深くしずんでゆく。普段そこが行きつまりになつてゐたへんを容赦なく突きぬけて、僕の知らぬ深い奥底へおちてゆく」といふのも、やはりマルテの悲しい述懐であつた。」(4 「マルテの手記」跋 (P.45))

8項 「ヴァレリーがミュゾットの山荘に閉じこもる彼を、「あなたは純粹な時間のなかに閉じこもるかと思えた。おなじような日々をならべて、その向こうにはつきり死をのぞかせておくような」と表現するように。ノルウェーの作家オプストフェルダアをモデルにしたマルテ・ラウリッツ・ブリッゲと言う人をつくりあげた彼は、その仕事に身をはがれたのだろう。」
「雑記」「スイスの山深いミュゾットの山荘に住んで、ひとり孤獨な生活のなかに閉ぢこもつてゐるリルケをたづねたヴァレリ

イは彼の犀利な眼で（中略）あなたは純粋な時間のなかに閉ぢこもるかと思えた。おなじやうな日々をならべて、その向うにはつきり死をのぞかせておくやうな（後略）」（3「リルケ雑記」（Pp.38-39））

「マルテ・ラウリッツ・ブリッゲといふ人物はデンマークの作家オプストフェルダアをモデルにしたものであった。」（4「マルテの手記」跋」（P.41））

9項 「リルケがローマの庭園で見たというアネモネの狂おしさを僕は思う。暗黒の人知れぬ昇天であるマルテの苦しみを、かたつむりに例えたサロメの言葉を思う。」

「雑記」「僕はローマの或る庭園でみたアネモネの花をおもひだした（中略）」（ルウ・アンドレアス・ザロメへの手紙）」（4「マルテの手記」跋」（Pp.47-48））

「マルテの苦しみは、あたかもかたつむりが畸形な瘤のやうに殻をくつつけてあるいてゐるすがたにほかならぬ（後略）」（4「マルテの手記」跋」（P.61））

10項 「途方もない孤独。信仰と云う言葉を使う必要のなかった彼。キリストのために強いて自分を悪人にしたとは思わな」と言つた彼。」

「雑記」「僕はキリストのために、強ひて僕自身を悪人にしたいとは思ひません。」（5「リルケ小論」（P.79））

11項 「ジイドのところでダルトム辞典の「手」の項を見てドイツ語に掌を表わす言葉のないのにびつくりする彼。「僕がこの世にのこした多くの肖像のうちで、最も大切なのは、一人一人の友人の記憶と感性にきざまれた、はかない、消えやすい僕のおもかげにほかならぬ」——彼の遺書。」

「雑記」「彼は僕の書齋にグリムの大辞典があつたのをみて、うれしさに顔をかがやかした。（中略）つひに掌をさす言葉が見つからないのをみて、びつくりした。」（8「詩の位置」P.112））

「そして最後にリルケは「僕がこの世にのこした多くの肖像のうちで、最も大切なのは、一人々々の友人の記憶と感性にきざまれた、はかない、消えやすい僕のおもかげにほかならぬ」と言つてゐる。」（「巻末小記」（P.147））

12項 「ばらのとげで彼は死んだ。一八七五年十二月四日、プラウグに生れ、一九二六年十二月二十九日午前五時に死んだこのもつとも純粋な詩人リルケを、僕は心から思うのである、慕うのである。」

「雑記」「リルケは敗血症にかかつて死んだが、病氣の原因は薔薇の手入れをしてゐた際ふと刺さつた薔薇のとげだといはれてゐる。」（1「リルケの薔薇」（P.3））

「リルケがこの世を去つたのは一九二六年十二月二十九日午前五時であつた。」（「巻末小記」（P.146））

また、本論第一章末尾に挙げた「日記2」に類似、相関する五つ

の記述は、杜夫が大山の『リルケ雑記』に導かれるように、リルケの芸術観に惹かれ、リルケを慕い、自己を見つめていった姿の表出と理解することができる。

「日記3」は、先の「二」「日記」から見えてくること」で述べたように、『マルテの手記』の「見ることから学んでゆくつもりだ」を受け止めた杜夫が『リルケ雑記』を読み、「忘却」を信じ、詩の誕生のプロセスを享受していこうとした意志の表れと読み取ることができる。『リルケ雑記』では特に以下の章段に「忘却」に関連する内容があり、杜夫が共感的に読み取ったものと推察する。「日記2」と一部重複するが「日記3」に関わる具体的根拠として以下に列挙する。

そして詩人は、忘却のなかからふたび記憶がもどつてくるながい忍耐をまたねばならぬ。記憶が僕らの血となり、僕らの眼となり、僕らの表情となり、もはや名のないものとなり、僕ら自身と區別のつかぬものとなつて、初めて何かふとした偶然に、一篇の詩は記憶の影のなかからぼつかり生れてくるのだ。リルケは「マルテの手記」のなかでそんな意味のことを述べてゐた。(傍点引用者)(3「リルケ雑記」(Pp.30-31))

詩人はあらゆるものを想ひ出に持たねばならぬのだ(中略)しかも、ただ追憶を持つだけなら、何のたしにもならぬ。追憶が一ぱいになると、つぎにはそれを忘却することが出来ねばならぬだらう。そしてしずかに、ふたたび想ひ出がかへつてくるのを待つ大きな忍耐がいるのだ。追憶だけでは何のやくにも立たぬ。追憶が僕らの血になり、眼になり、表情になり、名まえ

のわからぬものになり、もはや僕ら自身とすこしも區別することが出来ぬものになつて、初めて、ふとした偶然に、一篇の詩の最初の言葉が想ひ出のまんなかに、想ひ出のかけらからぼつかり生れるのだ。(傍点引用者)(9「動物詩について」(Pp.132-133))

リルケの眼が、そのまま彼の認識したロダンの眼にほかならなかつた。彼は豹の眼をみてゐる。彼は豹がとほざかつてゆく時の足うらを見てゐる。しかし彼は、それらのものが忘却の淵にしづんでしまつて、もう一度意識の表面へうかび上つて来たものだけをうたつたのだ。正直に云つて、僕は(中略)やはりリルケのこの深さを愛してゐる。(傍点引用者)(9「動物詩について」(Pp.138-139))

「マルテの手記」にあるやうに、彼は忘却を信じ切つてゐたのにちがひない。忘却をくぐつて泛んでくるもののみが真実の感動であることを、彼は何の不安もなしに信じた。(傍点引用者)(9「動物詩について」(P.139))

「日記4」に関連する『リルケ雑記』の内容としては、特に2「愛の女」たちの内容全体であると考えるが、杜夫は、特に大山の論ずる以下のリルケの純一な愛を読み取つたものと推察する。

「マルテの手記」のなかに彼はかう書いている。「愛されることは、ただ燃えつきることだ。愛することは、長い夜にともされたくらいのランブのひかりだ。愛されることは消えること

だ。そして愛することは、永遠の持続だ」（2 「愛の女」たち（P22））

むしろ「愛の女」たちのなかには、あらゆるものを凌ぐ一途なこころの純一さがなければならぬ。そこにはもはや他から強ひられたものでないうつくしい一すぢの緊張があるのだ。「愛する」だの「愛される」だのいふ区別を、すつかり振りすてしまつた愛の無限があるのだ。（2 「愛の女」たち（P25））

以上のように、「日記1」から「日記4」までについて『リルケ雑記』と比較してみると、昭和二十三年、松本への郷愁に駆られ過去を追憶せざるを得ない中で、『マルテの手記』を読んでいた杜夫が『リルケ雑記』の内容を通してより深くリルケを理解し、一層惹かれていった状況が見えてくる。特に「日記2」は、『リルケ雑記』をほぼそのまま引用している記述（同一または類似）を全項について、明確に指摘することができた。また、「日記2」は『リルケ雑記』を教本的底本として杜夫が要点をまとめた内容であることが分かる。以上の点から大山を重要な媒介者として指摘することができ

四、題名『幽霊』をめぐる

『幽霊』は、一見したところ筋らしい筋もない。空襲や勤労動員など苛烈な戦争期を過ごし、少年から青年に移る時期の旧制高等学校生の主人公「僕」が、ひたすら自己の内部にある過去を見つめ、それを長時間かけて徐々に文学的イメージとして発酵させ、結晶させ

ていった物語である。「僕」は、杜夫の幼年期・少年期・青年期の現在が基礎になつて描かれているが、父の死の描写等事実とは異なつており、虚構の体裁をとっている。副題に「——或る幼年と青春の物語——」とあるように、作品中現在青年期の「僕」が自らの幼年期の埋もれた記憶を探し求めていくというライトモチーフによって全体は四章から構成されている。各章はそれぞれに呼応し響き合い、現在と過去、大過去が対応的に語られ、折り重なり、組み合わせられ、「僕」は忘却の意味を考えながら徐々に精神的に成長していく。最終章では、自分はどこから来て、どこへ行くのか、幼年期の深く埋もれた過去が明かされる。そして、〈死〉への親近感から〈生〉への意志を見出し、新たな生き方に覚醒していく「僕」を、北アルプスの夜景にギリシャ神話を融合させダイナミックに描いていった魂の遍歴の作品である。

ところで、杜夫はこの作品の題名『幽霊』をどのような思いを込めて設定したのであろうか。これまでの『幽霊』に関する論考では題名そのものについての具体的な考察と出会うことはなかった。杜夫が題名『幽霊』について直接語った痕跡は今のところ見あたらないうが、杜夫は、「幽霊」や「妖怪」「お化け」に特別関心を持っていたようである。『マンボウ雑学記』（岩波新書）の「第二章 お化けについて」では、日本の古代のお化けから各時代のお化けのエピソードを多く紹介し、お化けの分類までも考察しまとめている。また、平成元年の躁期、株取引をはじめたころの九月、杜夫は銀座煉瓦画廊にて「世紀の北杜夫の書並びに絵画展」を開催した。水彩画「火星とお化け」は、火星の浮かぶ宇宙に幽霊が漂っている作品であるが、杜夫の内面を表わしているように見える。加えて、絵本『よわむしなおばけ』では杜夫の言葉に、わだまことの絵を添えて出版し

ており、こうした足跡から、杜夫が確かに「幽霊」に関心があったことが見えてくる。題名「幽霊」の象徴する意味は、主題に関わる重要な問いであり、安易な判断は避けるべきであるが、本論考ではひとまずその題名の基本情報をめぐっておきたいと考える。

奥野健男は「解説」(『幽霊』新潮社)の冒頭に、個人的な思い出として、初めて手許に送られてきた『幽霊』の題名について「何か不気味で、そう言えば藓の花かなんかを描いたカバーは、仏壇にそなえてある花みために陰気くさく見えた。どんな事が書かれている本だろうとつい気になって、怪談めいた題名のついている『幽霊』という本をばらばらめくってみた」と回想している。

『広辞苑 第七版』(岩波書店)及び『日本国語大辞典 第十九巻』(小学館)によると「幽霊」は次のように書かれている。

【幽霊】①死んだ人の魂。亡魂。②死者が成仏し得ないで、この世に姿を現したものの。亡者。③比喩的に、実際には無いのにあるように見せかけたもの。(『広辞苑』)

【幽霊】①死者の靈魂。亡魂。②死者が成仏できないで、この世に現わすという姿。また、妖怪。おぼけ。③八朔に白無垢を着た②に見立てていう。④あてにならないこと。⑤実際は存在しないのに、あるように見せかけたものをいう語。⑥弁護士をいう。(『日本国語大辞典』)

また、「幽霊」は洋の東西を問わず世界に広く類似の記載があり、西洋でも、肉体が滅んでも魂が死なずに現世で彷徨ったり、現世への未練から現世に居座ったりする話は多くあるという。(『日本大百

科全書』(小学館))

それはそうと、リルケは一九一〇年一月に『マルテの手記』を上梓し、その四年後の一九一四年、雑誌「時代の反響」の八月号に「幽霊」(『リルケ全集 第五巻』(彌生書房))という短い一見奇妙なエッセーを寄せている。そこには、幽霊の存在、幽霊との接し方、幽霊の消えさせせ方といった内容がまとめられている。幽霊の存在の部分を次に引用する。

ぼくたちの世界に幽霊がいる。それは室内に現われ、夜半には人気ない広場にじっとたたずんでいる。朝になり、あたりが明るくなるにつれて、その姿は鮮明さをまして来る。そして、広場のまわりの家々は、光かがやく幽霊の姿をとおして、ぼくたちの眼に映じるのだ。中有に迷うひとつの魂が、この幽霊の姿を借りているのだが、その魂の存在に気づいた人も少くはないだろう。いや、実はだれもが知っているはずなのだ。というのも、この魂はありとあらゆる塚穴からさまよい出たものなのだから。誰もが知っている。とはいえ、いったい誰が、その正体を見抜いているだろう。(傍点引用者)(P.335)

前掲の「其の二」の考察「4 精神的思春期」では塚越敏の考察を引用し、リルケは『マルテの手記』の発行から十年後(一九二〇年)、日本の俳諧(蕉風俳諧)と出会っていったことを紹介した。更に、「生死の対立が消え、すべてがそのまま肯定される絶対の世界、実在界」(莊子の万物斉同の説)を生きていることを願った点について考察した。リルケの「幽霊」中の「中有」は一般的には東洋の仏教思想の言葉であり、衆生が迷いの世界で輪廻転生するとき、存在の状

態を四つ（本有・死有・中有・生有）に分けたうちの一つである。『広辞苑』には「四有の一つ。衆生が死んで次の生を受けるまでの間。期間は一念の間から七日あるいは不定ともいうが、日本では四九日。この間、七日ごとに法事を行う。中陰。」とある。

今後、この題名『幽霊』の視点からもリルケの影響について稿を改め考察を進めていきたい。

おわりに

本論考では、リルケの『マルテの手記』と『幽霊』の対比研究に向けて、『マルテの手記』の影響の証拠を立証すべく、「日記」や書簡、関連著書等にあたり考察した。リルケに関連する「日記」の記述内容には、『マルテの手記』の「詩」（「追憶」）に関する叙述と極めて類似している内容があることを指摘した。

『マルテの手記』と『幽霊』の対比研究における媒介者については、望月市恵と大山定一について「日記」や関連著書からその影響の具体的内容を指摘し考察した。杜夫の恩師望月は、ドイツ文学全般に杜夫を導いたものと考えるが、「日記」をはじめ、現存している資料では、リルケよりも寧ろトーマス・マンに関連する記述が目立つ。しかし、マンの叙述や望月と思われる人物を『幽霊』の素材として作品に描いていることは、杜夫が、執筆時の当面するマンと自分の状況を冷静に客観視し、作品に描いていた可能性があり、リルケと杜夫の対比を進めていく上で、それは、杜夫の独創性に関連すると考える。

また、大山については、『リルケ雑記』と「日記」を詳しく照査し、類似点、共通点を指摘し影響の証拠を明らかにした。当時の杜

夫は、『リルケ雑記』との出会いにより、リルケの「愛の女」に見られるような「薔薇の一すぢな純粹さ」に惹かれ、享受していったものと考える。また、ロダンの「仕事」に通底するようなりルケの芸術観を学んでいったものと考ええる。とりわけ、当時の杜夫は、松本時代への懐古と郷愁、昆虫や動物学の断念、戦争により失った過去に対する喪失感等を抱いていた。こうした当時の杜夫の関心事の一つであったであろう「過去」や「追憶」を察するに、リルケの「詩の誕生」の契機となる「忘却をくぐって泛んでくるもの」への関心は並々ならぬものがあつたと思われる。畢竟、杜夫は『リルケ雑記』から自己の精神を確立していく上で、多くを学んだものと考ええる。蓋し、この二人はリルケと杜夫をつなぐ重要な媒介者であるといふことができる。

ところで、自費出版本『幽霊』の復刻版（北杜夫文庫「収蔵」の「あとがき」）には、『幽霊』出版の経緯や青野季吉による推薦文等が記されているが、杜夫は自費出版本『幽霊』と現今に出版されている『幽霊』との相違点について述べており、主な内容は以下の点である。

- ・ 自費出版本は旧仮名遣い、正漢字で書かれたが、昭和三十五年の中央公論社刊以降は、「時代を考え新仮名遣い」とした。
- ・ 当時杜夫はトーマス・マンに凝っており、自費出版本では「形容詞、副詞をかなり多量につづけて並べた」が、昭和三十五年版以降、これらの修飾語句の一部を削った。
- ・ 自費出版本の「一般の辞書には載っていない漢字」（「杳」「泛」「黝」「黄龜蟲」等）で「凝った」表現は、新版では訂

正した。

よって、本論者においては、『幽霊』自費出版当時の杜夫の執筆時の状況や執筆の内容とより近い作品での対比研究を進めていきたいと考え、復刻版『幽霊』を研究対象作品としていくこととする。

今後は、『マルテの手記』と『幽霊』の具体的叙述に即して対比研究を進めていきたい。対比にあたっては、その類似点や相違点を明らかにした上で、杜夫の独創性を考察し、杜夫が『マルテの手記』をどのように享受し、『幽霊』に結晶させていったかを明らかにしていきたいと考える。

本研究を進めていく過程で、令和二年十一月二十八日、故望月市恵宅（安曇野市）を訪問させていただく機会を得た。長男一樹も既に逝去し、そのご令閨（昭子氏）との貴重な邂逅の機会をいただいた。杜夫と望月に関連する資料は、多くが既に散逸していたが、杜夫の望月宛の書簡、葉書が数点保管されていた。これらは、本研究の趣旨をご理解いただき、ご令閨の許諾を得てひとまずお預かりしている。今後、その詳細について分析、整理し研究を進めていきたい。

今回の訪問に際しては、安曇野市文書館館長、平沢重人氏に仲立ちをしていただき、日程調整、ご案内等を賜った。ご丁寧な対応、貴重なご助言に感謝の意を表する。

参考文献

- 1 『北杜夫全集』全十五卷（新潮社、昭和51・9・25～昭和52・11・25）
- 2 『リルケ全集』全七卷（彌生書房、昭和48・4・15～昭和49・9・5）
- 3 秋山正幸 榎本義子編著『比較文学の世界』（南雲堂、平成17・8・25）
- 4 北杜夫『幽霊』（復刻版第二番、「北杜夫文庫」）（中央公論社、昭和55・11・30）
- 5 北杜夫『幽霊——ある幼年と青春の物語——』（中央公論社、昭和43・3・10）
- 6 北杜夫『幽霊』（角川文庫、昭和43・2・20）
- 7 北杜夫『幽霊』（新潮社、昭和40・10・10）
- 8 北杜夫『或る青春の日記』（中公文庫、平成4・12・10）
- 9 北杜夫『或る青春の日記』（中央公論社、昭和63・11・7）
- 10 北杜夫『マンボウ最後の家族旅行』（実業之日本社、平成24・3・25）
- 11 北杜夫『マンボウ雑学記』（岩波書店、昭和56・9・25）
- 12 奥野健男『北杜夫の文学世界』（中央公論社、昭和53・2・10）
- 13 北杜夫・辻邦生『北杜夫・辻邦生対談——若き日と文学と』（中央公論社、昭45・7・10）
- 14 辻邦生『薔薇の沈黙——リルケ論の試み——』（筑摩書房、平成12・1・20）
- 15 大山定一訳『マルテの手記』（新潮社、昭和28・6・10）
- 16 大山定一『リルケ雑記』（創元社、昭和22・10・20）

- 17 大山定一『作家の歩みについて』（甲文社、昭和21・11・20）
- 18 生野幸吉訳『リルケ詩集』（白鳳社、昭和44・9・20）
- 19 富士川栄郎訳『リルケ詩集』（新潮社、昭和38・2・20）
- 20 高安國世『鑑賞世界名詩選 リルケ』（筑摩書房、昭和29・7・1）
- 21 塚越敏『創造の瞬間 リルケとプルースト』（みすず書房、平成12・1・20）
- 22 「國文學 解釈と鑑賞」特集北杜夫の文学世界」（至文堂、昭和49・10）
- 23 『別冊新評「北杜夫の世界」』（新評社、昭和50・4・15）
- 24 『北杜夫の世界』（新評社、昭和54・6・1）